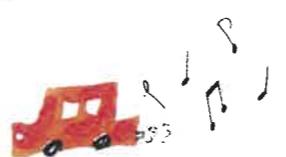




アクセス ACCESS (肥前浜駅まで)

【車でお越しの場合】

◆佐賀市内より 約50分



《高速道路(長崎自動車道)利用》

福岡市内 滝 長崎市

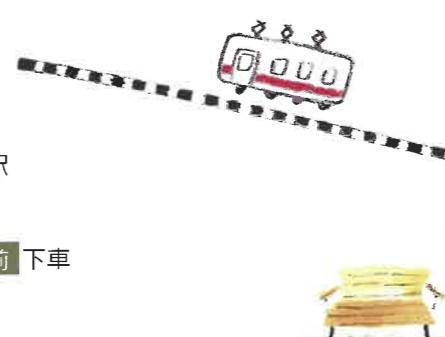
約100分 約60分

◆武雄・北方 IC下車 約30分

◆ 嬉野 | C下車 約20

【JRでお越しの場合】

◆JR長崎本線肥前浜駅下車



《JR特急 + 祐徳バス利用》

JR博多駅…………JR肥前鹿島駅…………JR長崎駅
約60分……………約60分

鹿島バスセンター 浜駅前 下車
約10分

浜・太良方面に乗車

浜の歴史を歩こう



《肥前浜宿酒藏通り》

浜の町は、浜川の河口につくられた町です。現在残っている町の景観は近世から現代にかけて形成されたものですが、町の元となる形は少なくとも中世の室町時代にはつくられていたと考えられています。それは、浜が佐賀平野としては最南端にあり、藤津郡や杵島郡の海の入口として、重要だったため、早くから港町として栄えたこと、そして同じ理由で、鹿島地方や佐賀平野を支配していた、あるいは支配したいと願った戦国大名たちが、戦略として重要な場所として考え、松岡城を築いたためです。

室町時代の初めには大村氏がこのあたりを支配しており、その居館は野畠や大村方のあたりにあったのではないかと思われます。その大村氏が敬っていたのが松岡神社です。大村氏は松岡神社の裏手の丘に松岡城を築きました。またその後、大村氏に代わって支配した有馬氏も松岡城を居城としました。

江戸時代になると鹿島鍋島藩の領地となり、多良海道が設けられ、港町としてだけではなく、宿場町として栄えました。また良質な水が湧出すること、周辺地域が米の産地であること、醸造した酒を運ぶための港があることから、酒の産地として、また藤津地区の様々な物産の重要な運送拠点として栄えました。



浜新町

浜新町は、その名のとおり「新しい町」という意味です。明治時代に町が繁栄し、旧多良海道に沿つて北西側に市街地が広がった地域です。明治時代は単に「新町」と呼ばれていますが、鹿島市として合併する際に、鹿島町にも「新町」があつたために「浜新町」となりました。新町の前は八本木村の一部でした。浜新町の区域のほとんどは旧多良海道から北側に広がる、中世から現代に造成された干拓地です。福吉・吉村・嶽山・福添・棒篭・柳原・長丁・一丁田・一本松・山田川の字名があります。干拓にまつわる地名が多いのが特徴です。



天満宮

浜新町の天満宮は、旧多良海道沿いにあります。祭神は天満宮ですので、菅原道真です。御神体は「天満宮」の石祠になっています。境内には寛文13年(1673)に33人の信者によって建てられた「御髪大明神」の石碑や、天和3年(1683)に建てられた「天照皇大神宮」の石碑があり、江戸時代の前期には、すでにこの神社が建てられていたことがわかります。この他、新四国八十八ヶ所霊場として十一面觀音の石碑や弘法大師、不動明王などの仏教に関する石碑も建てられています。



コラム「多良海道と浜の海岸」

浜新町の旧多良海道沿いの北側には、特に干拓に関連した地名が多く見られます。同様に、多良海道に沿って八宿・中町・北舟津・庄金・新方の地名を調べると、海道の海側に「籠」「搦」をはじめとする干拓特有の地名が数多く見られます。このことから、多良海道は浜の周辺では、有明海の海岸線に沿って造られていた可能性が高いことがわかります。また、酒蔵通りで埋蔵文化財の確認調査をしたときには、通りの北側(海側)では貝がらを含んだガタの層が出てきましたが、南側では出てきませんでした。このことでも海沿いの道であったことが裏付けられます。

それでは、いつ頃、海岸線の道ではなくたのでしょうか。このあたりの干拓の記録はよく分っていません。海道の海側にある石造物を調べると、浜新町の天満宮には江戸前期の寛文13年(1673)の石碑があり、中町や庄金にも江戸時代前期の1670~80年ころの石造物があります。おそらく、多良海道沿いが浜町の海岸線であったのは、室町時代以前ではないかと考えられます。

また旧多良海道を海岸線と想定して地図上に線を引くと、浜川に沿って細長く岬が突き出すような地形になり、ちょっと不自然な地形になりますが、以前は現在の浜川とは異なった位置に河口があった可能性が指摘されています。

貞享2年(1685)に鹿島藩第4代藩主鍋島直條が書いた「鹿島志」には「浜津」は「川に沿って人家500余りがある。」と書かれているので、江戸時代前期には現在のように浜川が流れていると思われます。

八宿

八宿は「八本木宿」が短くなった地区名です。では「八本木」という地名の由来は何でしょうか。この地名は、「景行天皇の時代に日本武尊がこの地においてになったときに、八つの幹が出た松がうつそろと茂り、尊はこの松をご覧になって、「あの木は最も愛すべきものだ。」といわれたので、この地を「八本木の里」というようになつた。」という伝説があります。昔は現在の新町・野畠・八宿の地域あたりを八本木村と呼んでいたようです。また「宿」と地名がつくように、江戸時代の宿場町の中心となる地域でした。現在でも「八宿」には、「継場」と呼ばれる建物が残っています。「継場」は旅人の荷物を次の宿場の継場まで幕府が定めた人馬の料金で送る問屋でした。また、八宿から中町にかけての「酒蔵通り」は、江戸時代から近代にかけて、浜が酒造りが盛んだったことを反映して、当時の酒造業を中心とした白壁土蔵の歴史的建造物の町並みが、色濃く残っています。八宿の地名には町裏・平松・南平松があります。

2 継場

継場(「問屋場」「継立場」ともいいました。)は江戸時代に宿場から次の宿場まで人や荷物を運ぶ仕事を行なう場所でした。八本木宿の継場は、八宿公民館(旧浜郵便局)のとなりにありました。この建物は、入口には馬をつないだ鉄輪や帳場が残っています。建物の特徴から江戸時代の18世紀の終わり頃に建てられたと考えられます。明治時代以降には呉服問屋や浜郵便局の局長官舎として使われていました。平成14年に明治時代初期の呉服問屋として使われていた頃の姿に復元工事が行われました。現在は国の登録有形文化財になっています。



3 知恩寺

知恩寺は浄土宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。750年ほど前の鎌倉時代の建長年間に聖達上人を開基として造られたといわれます。最初は古枝にありました。その後、現在の泰智寺の場所に移転しました。その後、元和8年(1622)鹿島鍋島藩の菩提寺として泰智寺が造られた時に、藩主の命令で現在の位置に移転しました。しかし、文政11年(1828)に火事で焼失しました。禪誉上人の尽力により再建されましたが、明治27年(1894)に再び火事で焼失し、金誉上人や檀家の協力で現在の建物が再建されました。



コラム「浜町の重要伝統的建造物群保存地区」

浜地区には「鹿島市浜中町八本木宿(略「浜中町八本木宿」)」と「鹿島市浜庄津町浜金屋町(略「浜庄津町浜金屋町」)」の2つの地区が、国の「重要伝統的建造物群保存地区(略「重伝建地区」)」に選定されています。この重伝建地区は、「全国様々な地域の歴史や文化によって形づくられた、歴史的な集落や町並みの中で、特に価値が高いもの」として、国が選定した地域のことをいいます。全国には、集落や港町、城下町など様々な100を越える重伝建地区があります。重伝建地区は町並みの景観を守るために、建物の外壁の色などに対してガイドラインを制定しています。また地区内では自治体から補助金によって、歴史的な建物の修理などを行ない、住民と行政が力を合わせて町並み景観の保存に努力しています。

浜地区的町並みの特徴は、浜中町八本木宿は、近世の宿場町から酒造など醸造業を中心に発展し、居蔵造町屋、土蔵造大型酒蔵、茅葺町屋、武家住宅、洋風建築など質の高い建築が豊かな町並みを作り出し、変化のある独特的の風情があります。また浜庄津町浜金屋町は、近世の鹿島鍋島藩の港町として、商人や船乗り、鍛冶屋などが住み発展しました。町並みには、表通りの多良海道と裏通りから延びる小路や水路が走っています。河港の在郷町として当時の地割りをよく残し、茅葺や桟瓦葺の建物が建並びます。

二つの地区は、平成18年(2008)7月に選定されてから、多良海道沿いなどでは、しつくい壁が落ちていた白壁土蔵の建物などが徐々に修理され、道路やトイレ、消火栓の整備が進み、きれいな町並みに変わりつつあります。

また平成24年(2012)からは、鹿島酒蔵ツーリズムが始まり、年々観光客が増加し、現在では鹿島市でも重要なイベントの一つになりました。酒蔵ツーリズムは酒を通じた町おこし、鹿島の酒蔵を巡り、蔵人とふれあい、彼らが造る酒を味わい、その酒が生まれた土地を散策しながら、食や文化、歴史を全身で楽しむイベントです。その中核となる祭りである「花と酒まつり」は浜中町八本木宿周辺で開催されています。その中で、すばらしい歴史的な町並み景観が祭りの開催に彩りを添えています。



浜町の重要伝統的建造物群

中町

中町は承応元年(1652)の物成帳には「中町」の地名が出てきます。中町の名前の由来はよくわかつていません。比較的古い町で中世にさかのぼる可能性がある大村方・八宿や庄金の町の中間にできた新しい町なので中町と呼ばれた可能性もあります。江戸時代前期の『鹿島藩日記』などの史料には「浜八本木」の名前と並んで「浜中町」が出てきますので、浜町がこの2つに大きく別れていたことがわかります。中町には「客屋」や「別当」が置かれており、浜町でも中心となる町であったことがわかります。中町の小字は中町のみです。

④ 天満宮

浜川のほとりに天満宮があります。祭神は「菅原道真」で石像が祀られています。明暦2年(1656)につくられたと伝えられます。境内には延宝5年(1677)の庚申塔の他、寛政10年(1798)や安政2年(1855)の地神・水神・稻荷大明神の石祠があります。



コラム「水害と天満宮」

天満宮は地域に必ず1つはあるといつてもいいくらいに数が多い神社です。これは「菅原道真公」が「たたり神」として、さまざまな災いを引き起こしていると思われていたため、その災いを避けるために、これほど多くの「天満宮」が造られたのです。この天満宮が、川の堤防のすぐ近くに造られていることがよくあります。天満宮ではなく「水神」などの水の神様が祀られていることもあります。中町の天満宮もまさしくそのような場所に位置しています。これらの神様が祀られている場所をよく見ると、川が曲がっている外側など、洪水で川が決壊しやすい場所、あるいは過去に決壊した場所に造られていることが多いのです。まさしく川の守り神として神社が造られています。また神社にはご神木が植えられていますが、川のほとりに植えられたご神木の大木は、地下に根を張って堤防の決壊を防ぐ役割としても、大きな意味を持っています。

北舟津

北舟津という地名には、その名のとおり「北の港（舟津）」あるいは「港の北側」という意味があります。この地名は承応元年（1652）の物成帳にも書いてありますので、古くからある地名です。現在は浜川の北側が「北舟津」地区、南側が「南舟津」地区になっていますが、古くは「南舟津」という地名ではなく、現在の庄金・南舟津地区も含めて「北舟津」と呼んでいたようです。これは新方の開浦が干拓されるまえに、開浦にあった港（舟津）に対して、浜川沿いの港全体を「北舟津」と呼んでいたなごりと思われます。地区の中にある字名は「番所」「町添」「北舟津」「松岡」がありますが、その全ての字名がつく干拓の記録があるので、現在の北舟津地区はほとんどの部分が干拓によって造られたと考えられます。



6 大明神(龍神社)



JRの鉄橋のそばに、通称「大明神」というお堂があります。このお堂は大きな岩を御神体として祀ってあります。そのそばには昭和27年7月に建てられた碑文が立ててあり、「昭和27年7月に北舟津の防波堤の改修工事のため、大明神を元の位置から約10m北に移動した。大明神の由来は、文献などはないが、言い伝えによれば、約400年前に浜の人たちが相談して、沖の島の岩の一部を南舟津の海岸に運んできて安置し、その約200年後に対岸の北舟津の川岸に移した。最初は単なる記念物に過ぎなかつたが、年月がたつにしたがつて、付近住民の守護や海上安全祈願の対象として「大明神」として敬われるようになったのだろ。今では区の中心にあって、地区の住民の尊敬がきわめてあつい。」という意味の宝円寺住職山田開藏氏による碑文が書かれています。

7 番所

「大明神」がある場所は、「番所」という字名がついています。貞享4年（1687）の郷村帳に「番所」の記載があります。「番所籠」が完成したのは元禄2年（1690）ですので、当時は、海に面した浜川の港の入口に当たっていたと考えられます。文字通り浜の港に入りする船や荷物の監視を行なっていたのでしょうか。

5 宝円(寶圓)寺

観後山宝

円寺は浄土真宗の寺で、本尊は阿弥陀如来像です。江戸時代の寛永年間のころ、浜に伊勢国の大



身で山田五郎左衛門左利友という人がいました。寛永14年（1637）に天草の乱が起こり、家老の田中安心は鹿島の藩士を率いて島原に出兵しましたが、この山田氏も船頭長を命じられ、船頭一下、船を非常に速くこいだいで、島原にいち早く到着することができました。乱の後、田中安心は山田氏にもほうびを与えようと思ひを聞いたところ、「特に望むことはないが、ただ一つ望むことがある。この村は漁業者で気風が荒い。寺院を建立して、村民の心を和らげたい。」と望みました。そこで田中安心は藩主の鍋島直朝公に願い、寺を創建してやりました。その後、寛文元年（1661）年に本山に願い、木仏と寺号をもらい開山としたといわれます。

の野畠

「野畠」と書いて「のばこ」と読むちょっと変わった地名ですが、「野畠」という字が東部中学校の敷地の北側にあります。この字名が地区名に付けられたと考えられますが、字名の由来は分りません。野畠という地名は比較的古く、貞享4年（1687）の郷村帳には「八本木村」として「本野畠村」「新野畠村」「浜町」として「野畠」が出てきます。このことから、「野畠」地区は当時は「八本木村」と「浜町」に大きく別れ、その中で更に細かく町や村にわかれていたことが分かります。また「野畠」には当時からかなりの人が住んでいたことが推測されます。野畠地区は、字名として「岩岡」「山上」「谷山上」「菅原」「片郡」「城下」「馬場副」「犬馬場」「内前田」「仁田山」「陣ノ上」「野畠」「協和籠」（浜干拓）があります。



8 松岡城

東部中学校の裏の南の丘には中世の山城である松岡城が築かれていたと考えられています。松岡城は、15世紀中頃は大村



「松岡城推定地」

氏、16世紀には有馬氏が治めていたといわれます。周辺には「城下」の他、「陣ノ上」「犬馬場」「馬場副」など城の存在を感じさせる地名があります。また、地区全体の名称と同じ「野畠」という字が東部中学校の北側にあります。この「野畠」は周りをすべて「城下」の字で囲まれています。中世の山城は、日常は城の近くに館を構えて住み、戦の時に、城に籠って戦うのが一般的な戦い方ですので、この字「野畠」に城主の館があつたのかもしれません。また、すぐ隣に犬馬場があるのも、その可能性を強く感じさせます。

9 「犬馬場」と「犬追物」

中世の武士が馬に乗りながら矢を射る訓練の一つとして「犬追物」という競技を盛んに行なっていたことが知られています。馬に乗った武士が、馬場に解き放った犬を矢で射る（犬が死ない様に矢の先にカバーが付いた「犬打引目」という矢を使います。）競技で、この競技を行なう場所を「犬馬場」といい、現在でも全国各地にその地名が残っています。野畠の「犬馬場」もその一つと考えられます。犬馬場の広さは、年代や場所によつても異なっているようですが、東西42間（75m）×南北40間（72m）という記録があります。野畠の「犬馬場」にはこの大きさに近い区画があります。この場所で行なった埋蔵文化財の調査では、地下から非常に堅く締まった土の層が出てきました。おそらく当時の馬場の表面の土ではないかと考えられます。



犬追物 豊原周延（1897）メトロポリタンミュージアム所蔵



「犬馬場」推定地

10 松岡神社

祭神は、「日本武尊・素戔嗚尊・伊弉冉尊」です。松岡神社の由来にまつわる伝説があります。『景行天皇の時代(古墳時代頃)に皇子の「日本武尊がこの地を訪れたときに8つの幹が出た見事な松があり、感動して「あの木は最も愛すべきものだ。」と言われたことから、この地を「八本木」と言うようになった。人々は尊をしのび、神社を造り、尊をまつった。これが松岡神社の由来である。』というものです。神社は、以前は字城下(東部中学校付近)にありましたが、敷地が狭かつたので現在の地に移りました。



11 今松社

今松社は元々、現在の東部中学校の一角にあり、松岡神社の「下の宮」として、祇園祭の時は神輿が立ち寄る場所になっていましたが、元禄5年(1692)から下の宮が大村方の「若宮神社」に替わりました。東部中学校の建設で立ち退きになり、現在のように松岡神社の一角に移されました。



コラム「祇園祭」

松岡神社のお祭りは「祇園祭」として有名ですが、みこし神輿が出るようになったのは、室町時代の文明年間(1469~1486)といわれます。この祇園祭にまつわる中世の逸話があります。室町時代には、浜は大村氏が治めていました。当時対立していたのは小城を治めていた千葉氏(当時、現在の千葉県を治めていた千葉氏の一族)です。千葉氏は文明元年(1469)に浜に攻めてきましたが、ちょうどその日は祇園祭の日でした。千葉氏の軍勢は乱暴な振る舞いをして、祇園祭をさまたげたのです。ところが突然天候が急変し、嵐が来ました。千葉勢は「神のたり」と驚き、船に乗って逃げ帰ろうとしましたが、途中で難破し、多くの兵がおぼれ大将もおぼれ死んでしまいました。このことから、ますます氏子の人々の松岡神社に対する信仰もあつくなつたといわれます。祇園祭では、神輿のほか、浜地区では唯一の面浮立である「野畠面浮立」も奉納されます。

12 浄安寺

浄安寺は浄土宗のお寺で、本尊は阿弥陀如来です。江戸時代の元文年中(1736~1740)に建てられました。境内には大きなイチョウの木があります。昭和16年に落雷の被害にあうまでは国の天然記念物の指定を受けていました。



13 泰智寺

泰智寺は、曹洞宗のお寺で、本尊は釈迦如来です。元々は北鹿島の常広にあった「天徳山深立寺」というお寺です。ところが常広は水害が多かったため、当時の鹿島鍋島藩初代藩主鍋島忠茂は、元和8年(1622)にこの場所にあった「知恩寺」を中町の現在の場所に移し、深立寺を北鹿島から移しました。そして寺名を「祇園山隆心寺」とし、鹿島鍋島藩の菩提寺としました。その後、第2代藩主鍋島正茂が寛永2年(1625)に名前を「泰智寺」と改めました。

慶安3年(1650)浜町の大火の時に寺は門を残し焼失してしまいましたが、第3代藩主鍋島直朝が再建しました。また延宝5年(1677)古枝に普明寺がつくられ鹿島鍋島藩の菩提寺となつたため、以降泰智寺には、歴代藩主の遺髪が納められることになりました。寺の裏には歴代藩主の墓が並んでいますが、その右端には御靈屋みたまやがあり、鹿島初代藩主鍋島忠茂とその夫人の墓が収められています。また、本堂には市重要文化財の「木造頂相像」「木造羅漢像」があります。



泰智寺本堂



歴代藩主の墓



鍋島忠茂と夫人の墓

庄金

庄金地区は庄津町と金屋町のふたつの町の頭文字を取つてできた地区名です。「庄津」とは船頭の事、「金屋」とは金物を中心とした道具の事ですので、船に関する人々が住んでいた町であったことがわかります。瓦葺土蔵造りの建物が中心である八宿中町の酒蔵通りに対して、草葺きの民家の割合が多いのが町並みの特徴となっています。

庄金は浜町の中でも古い町で室町時代にさかのぼる可能性があります。地区の中心をとおる道は旧多良海道で、海道の海側近くには「町裏籠」など干拓に由来する地名があり、干拓で造られたことがわかります。中世末頃は庄金の通りのすぐ裏が船着場だったかもしれません。庄金地区は、字名として「多々良川」「庄津」「山元」「金屋町」があります。



14 ことひら 事比羅神社

事比羅神社は、香川県の金毘羅神社の分社です。江戸時代になると船を使った物流が盛んになりました。海の神様である金毘羅神社の分社が全国各地につくられました。浜の事比羅神社もその一つです。現在神社の社殿までは浜川沿いの道から長い階段を上っていきますが、古い絵図を見ると船から直接お参りができるように階段は川の中からつくられています。昔は出港する直前に安全を祈願し、帰ってきたときには真っ先にお礼参りをしていたのでしょう。また現在の事比羅神社の敷地は独立した丘のように見えますが、尾根の先端を人の手で切断してつくられた人工的な丘です。これは中世の城である臥龍城の一部と考えられます。



15 こうごんじ 光厳寺

光厳寺は浄土真宗のお寺です。本尊は阿弥陀如来です。もとは嬉野市の吉田地区にありました。寛永年間(1624~1644)に鹿島藩3代藩主鍋島直朝の命により浜の野島に移りました。その後現在の場所に移りましたが、文久元年(1861)浜の大火の時に焼失し、その後再建されました。



16 じょうりゅうじ 浄立寺

浄立寺は浄土真宗のお寺です。慶長10年(1605)につくられたと伝えられます。本尊は阿弥陀仏立像です。正保2年2月2日の浜の大火により記録類は焼失したと伝えられます。



17 えびすさぶろう 「恵比寿三郎の碑」

恵比寿信仰は古くは平安時代から始まりますが、全国的に広まるのは江戸時代になってからです。

恵比寿信仰で有名なのは兵庫県の西宮神社です。「えびす」とは本来人々の前に時たま現れる外来物に対する信仰であり、海を漂ってやってくる宝物(クジラや海の幸など)に対する信仰です。転じて「漁業神」や「海運振興」「商業振興」「海上交通安全」「水の神」などの信仰もあります。またえびす像は海を漂ってくる宝のシンボルとして「タイ」を抱えた姿としてつくられます。

このような具体的な神様の姿としてつくられるようになったのは、「えびす」を含めた七福神の信仰が室町時代の終わり頃近畿地方で始まってからといわれます。

現在町かどでよくみられる石像の「えびす像」はタイをかかえた姿がほとんどですが、庄金にある「夷(えびす)三郎」の石碑は、貞享4年(1687)につくられた文字が書かれただけの石碑で、佐賀県内でも3番目に古いものです。

夷三郎の碑



南舟津

南舟津は比較的新しい地区名で、宝円寺の記録では江戸時代の中頃は「向 北舟津」（「北舟津の川向？」あるいは「向かい側の北舟津？」）・「向舟津」（舟津の向かい側という意味か？）と呼んでいたようです。その後天明5年（1785）頃から「南舟津」という地名が現れます。公の文書では、ようやく明治時代以降に地区名として登場します。現在は川の北岸が「北舟津」、南岸が「南舟津」という意味ですが、江戸時代の前半までは、新方付近にあつた港（舟津）に対し、浜川周辺の港全域を「北舟津」と呼んでいたようです。字名は「中籠」「町裏籠」「北舟津」「北新地」「南新地」と干拓由来の地名が並び、「南舟津」地区であるにもかかわらず、「北舟津」という字名もあります。



18 峰松春吉君頌徳之碑

峰松春吉氏（1847～1934）は明治大正期に浜町の漁業の振興に大きな力を発揮した人物です。浜地区は漁業ができる海域が狭く、漁獲量が少ないため漁民は苦労していました。そこで峰松氏は長崎や熊本と粘り強く交渉し、私財を投げうつて浜の漁民が操業できる海域を獲得し、浜町の漁民の生活を安定させることができました。浜の漁民はそのことに感謝し、この碑を建てたのです。



コラム 浜町の遠洋漁業

浜町の遠洋漁業が行われるようになった理由は、浜町が漁業ができる海域が狭かったことや乱獲による漁獲量の低下のため、朝鮮半島に乗り出さざるを得なかつたことが大きな理由のようです。佐賀県水産要覧（昭和18年発行）には明治18年から浜町の渡辺という人が、朝鮮半島の西海岸に出漁してから遠洋漁業が始まったと書いてあります。このころ使用していた船は全長8メートルほどの小舟だったので、大変な思いをして遠洋漁業に乗り出したに違いありません。明治27年には多々良氏が帆船5隻の船団で鰯漁をしていたようです。その後、漁業組合が設立され、他府県からの参加が加わり、明治33年頃には1府19県から1,893隻もの漁船が出漁しました。その後も出漁数が増え、対象魚もアンコウが中心となりました。漁船の数も全体で3,960隻まで増加し、漁船も動力化が進み大型化していきました。浜地区の遠洋漁業のピークは大正10年で、浜から140隻の船が出漁しました。しかしながら太平洋戦争がはじまってアメリカ軍の侵攻が激しくなり昭和18年に中止されました。

朝鮮半島までの航海ルートは、大浦、諫早、島原半島を回り、野母半島先端の樺島で風待ちをして、平戸へ。ここから玄界灘に乗り出し、壱岐・対馬を経由して朝鮮半島にたどり着きました。朝鮮半島までは早くても半月かかりました。

小さな船で玄界灘を渡るため、遭難事故もたびたび起こりました。最も大きな遭難事故は、大正11年に対馬で発生した対州遭難です。当時の新聞によれば、20数隻の船が遭難し、死者の数50人。このうち浜の船は12隻で26名（うち浜16名）の方が亡くなりました。



浜町朝鮮出漁状況図(浜町漁業組合所蔵)

湯ノ峰

「湯ノ峰」の地区名は「湯ノ峰山」に由来することはよく知られていますが、「湯の峰」というからには温泉でもあったのでしょうか。実は昔は湯が出ていたといわれています。江戸時代の鹿島藩4代藩主鍋島直條が書いた「鹿島志」には「宝篋塔山（江戸時代の湯ノ峰山の名前）」は「浜の港の南にそびえ、昔、宝篋を造立し石塔に印して（「宝篋印塔」の事）鎮めた。そのためこの名前がある。今なおその遺跡がある。もう一つの名前に「湯峰」がある。昔温泉が出たらしい。そのためこの名前がある。…」という内容のこととが書いてあります。字名は「黒岩」「岡山」「源八」「外平原」「小寺」「相源寺」「内平原」「上平原」「水梨子」「水打場」「西湯峰」「丹土坂」「湯峰」「弁天平」「南野田」「一本杉」「谷地蔵」「丸山」「地蔵」「小原」「西坂ノ上」「千本」「糸小屋」「浜崎」があります。



19 天満神社

湯ノ峰開田の小高い場所にある天満神社で通称「開田天満宮」とよばれています。この天満宮の由緒が淨立寺の記録に書かれています。「淨立寺の開基がまだ出家する前、川岸で釣りをしていたところ、紫色の石が引っかかった。何気なく捨てて、また釣り糸を垂れたところ、また同じ石が釣れた。このことが何度も続いたので、不思議に思ってその石を持ち帰って取っておいた。その後、この地に小さな森があり、天神と称して神社を造り、この石をまつった。」というものです。現在この石は無く、ご神体は明治時代に造られた「天満神社」の石祠です。



新方

新方の地区名は「新しい場所」という意味から名付けられたのではないかと思われます。新方という地名が記録に現れるのは明治になってからです。その前は「開田村」と呼ばれていたようですが、現在の新方の地域と一致するかどうかは不明です。江戸時代の中頃には開田という地名が現れること、また地区内にある七郎宮の由来などを考えると、新方地区の平地の大部分は、江戸時代の中頃以降に干拓されてできた土地と考えられます。このことは、埋蔵文化財確認調査でも確認されています。

干拓される前の地形を復元すると、新方は大きな浅い湾になっており、浜崎は文字の意味どおり、湾の北側につき出した岬です。またこの新方の湾は浜川の河口に港が整備される前は、浜の港の中心地域であつた可能性が指摘されています。字名は「西葉籠」「開籠」「小寺籠」「宮ノ前」「坂ノ上」「開村」「保木」「大久保」「内富」「尾ノ上」「壹岐峰」「東開川内」「皿山」「柚ノ木」「柿ノ木」「西開川内」「東湯峰」「穴谷」「御田平」「轟」「浜崎籠」です。このうち干拓された場所と思われる地名は「開籠」「開浦」「小寺籠」「浜崎籠」です。



20 天満宮

現在ある天満宮は通称「浜崎天満宮」と呼ばれています。天満宮の石祠がご神体になっています。



七郎宮

21 七良宮

七郎宮の祭神は建御雷神で戦いの神様として有名です。変わった名まえの神社ですが、浜の他には七郎宮もしくは七郎神社として平戸・壹岐・多久・佐賀などにあります。七郎宮のある場所は、新方が江戸時代前期以前に湾だった時には、湾の一番奥に位置していました。

後の浜川沿いに港が整備された時代には航海の安全を祈る神社は庄金の金刀比羅神社ですが、新方に港があった時代に安全祈願をしていたのは、この七良宮でした。現在七郎宮の前は海ではありませんが、その時の名残で、川に向かって鳥居が立っています。海に面していた当時は船からまっすぐこの神社に参拝していたでしょう。島原の乱が発生した寛永14年(1637)には鹿島鍋島藩の家老の田中安心は、七郎宮に開運を祈願し出陣したと言われています。また無事凱旋することができたとして、それ以降この地を運を開く浦として「開浦」と呼ぶようになったといわれています。



また、当時この神社が鹿島にとって重要な神社だったことの証拠として、神社の「七郎宮」の扁額は、第3代鹿島藩主鍋島直朝の長男の断橋和尚(普明寺の開基)の筆によるものです。



22 浜皿山

七郎宮から数百m上ったところに皿山の集落があります。ここは江戸時代から昭和初期にかけて、登り窯で焼き物(磁器)が焼かれていた場所です。浜皿山の開山は万治年間(1658-61)もしくは宝永年間(1704-11)ともいわれますが、確実ではありません。鹿島鍋島藩の記録では、享保3年(1718)浜の壹岐峰に皿山を造ることを願い出て許されました。理由があつて途中でやめたようです。その後、安永4年(1775)に再興されました。磁器と言えば有田が有名ですが、「内山」と呼ばれる有田に対し、浜皿山は有田周辺部の「大外山」と呼ばれる窯跡になります。

有田焼で使用する陶石(焼き物の材料となる石)は、最初の頃は有田産のものを使っていましたが、しだいに良質な陶石が少くなり、天草でとれる陶石の質が非常に良かったことから、船で天草から運んでくるようになりました。この浜皿山や塙田志田は運搬の中間点にあたり、運搬経費が削減できることから、磁器が焼かれるようになったでしょう。しかしながら、鍋島本藩は当時の最高級の磁器を焼く技術が、他の地域に流出しないよう厳しく統制していました。それは支藩である鹿島藩についても同様でしたので、浜皿山や塙田志田についても、高級な焼き物を造ることができず、一般庶民向けの製品を作っていました。有田内山で使用する陶石は材料の表面の黄色の部分を削って、中心の白い部分のみ使用しますが、一般向けの浜皿山や志田焼は削らずにすべて使いますので、できた製品は素地が白くならず、灰色になってしまいます。そこで器を白く見せるために焼き物の表面に白い粘土を塗ったものなども見られます。

窯跡の南側には歓喜神社があります。明治の中ごろに窯の関係者によってつくられた神社で、祠の中には窯神の石碑が祀っています。



浜皿山全景



浜皿山窯跡出土遺物
(窯の中で製品と窯道具がくつついたもの)

歓喜神社